

漱石が見つめた近代

夏目漱石没後百年。ETV 特集 12月3日は、生前彼の目に彼の目に、日本の近代化がどう映っていたか、2度の海外体験などを踏まえて探求する90分番組。姜尚中さんが漱石留学先のロンドン、旅順・大連・ハルビン・ソウルなどをめぐり、文明批評家・夏目漱石の新たな姿に迫る思索紀行。

番組を見る前に、たまたま手にしたのが夏目漱石『私の個人主義』講談社学術文庫。明治44年、漱石45歳の大阪朝日新聞主催の関西講演会での講演筆記を改稿した評論である。



『道楽と職業』『現代日本の開化』『中味と形式』『文芸と道徳』の4篇。それと本書のタイトル「私と個人主義」は、大正3年に学習院で講演したものである。

漱石の小説は何冊か読んできたが、こうした評論は初めてで、じつに新鮮な味わいがあった。いまに通じる問題が、漱石特有の言い回しで述べられている。漱石の講演からも学ぶことが多かった。ここでは、とりわけ示唆を得た「現代日本の開化」について、本書解説をすこし紹介する。

和歌山で試みた講演『現代日本の開化』は日本の現代文明論であり、漱石文学の重要な主題として繰返し考究された問題である。長篇小説『三四郎』『それから』なども、この見地から見ることができる。漱石にとっては根本的には西洋と日本との問題であり、また近代日本の宿命に関する問題である。

漱石は一般の開化、すなわち西洋の開化を論究してから、日本の開化に及び、どこが異なるか、その特色を明かにする。西洋文明が自然発生的に発展してきたことから、これが「内発的」であったとすれば、日本文明は、明治維新後に西洋文明の刺戟を強烈にうけて跳ね上る、「外発的」なものであったと論断する。日本文明は古代から中世にかけて比較的自給自足の活力で発展してきたのに対し、維新後は二百年の鎖国の夢が破れて外国文明の刺戟に遭い、急激に曲折しはじめたと、その委細を論じた。漱石が日本の近代化が「内発的」ではなくて、「外発的」であると論断したことは、今まで先学の人々が軽視してきた点を明白にした点で第一の功績であり、この論文を有名にした第一の点である。

この論文を読んだとき、「内発的」「外発的」という言葉に注目した。開発のあり方だけでなく、日本の近代化にとってもキーワードになる。「漱石論」を読んでいきたい。

(2016年12月18日)